

# カラフトマス 日本系

Pink Salmon, *Oncorhynchus gorbuscha*



## 管理・関係機関

北太平洋溯河性魚類委員会 (NPAFC)  
日口漁業合同委員会

## 利用・用途

用途は広く、塩蔵品、生鮮、缶詰等がある。魚卵製品として、筋子（ます子）がある。

## 最近の動き

日本系カラフトマスの沿岸における 2015 年の漁期中（7 ～ 12 月）の漁獲数は 186 万尾で前年比 142% であった。2003 年以降、奇数年が豊漁年で偶数年が不漁年というパターンが続いたが、最近 5 か年この傾向が不明瞭になっている。2016 年の漁獲尾数は 814 万尾と大きく回復したが、資源動向は不安定であると考えられる

## 漁業の特徴

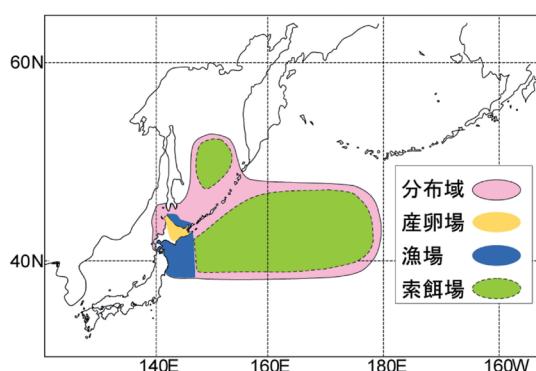
主に北海道北東部沿岸の産卵河川周辺で夏～秋季に定置網で漁獲される。広く北太平洋を回遊するが、北太平洋公海のさけます漁業は禁止されている。他国 200 海里水域内の漁獲量は不明である。

## 生物学的特性

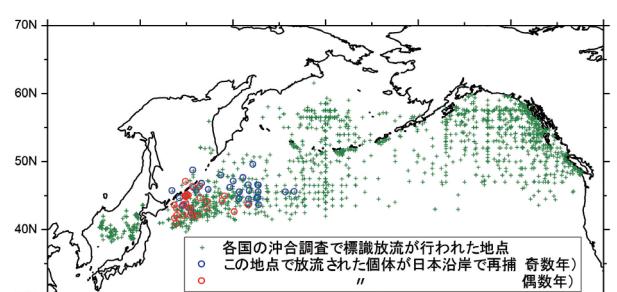
- 体長・体重：尾叉長 50 cm・1.5 kg
- 寿命・成熟年齢：ほぼ全てが 2 歳
- 産卵期：8 ～ 10 月
- 産卵場：北海道北東部に流入する河川
- 索餌期・索餌場：夏期・北西太平洋
- 食性：水生昆虫（河川）、動物プランクトン・マイクロネクton（海洋）
- 捕食者：鳥類・オショロコマなど魚類（幼魚）、ネズミザメなど大型魚類・オットセイなど海産哺乳類（未成熟魚・成魚）

## 漁獲の動向

1970 年代から沖合域での漁獲量は減少し、沿岸域の漁獲量が増加した。沿岸漁獲尾数は、1990 年代に急増し偶数年と奇数年の差も広がった。しかし近年、奇数年と偶数年で一定の豊凶が見られるものの、そのパターンの持続性は不明瞭になり、さらに 2015 年にかけては減少傾向にあった。2015 年漁期（7 月以降）の沿岸漁獲量は 3,043 トン（186 万尾）であった。2016 年漁期の沿岸漁獲量（速報値）は 12,351 トン（814 万尾）で、中位水準に回復した。最近 5 年間（2011 ～ 2015 年）の沖合を含む漁獲量は 3,000 ～ 9,000 トンであった。



日本系カラフトマスの主たる分布域（高木ほか 1982 を改変）

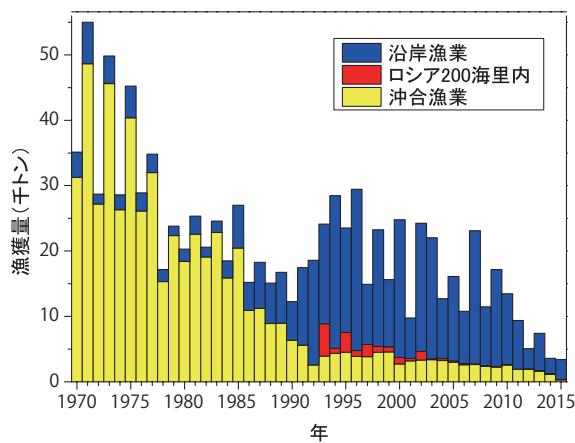


標識放流（1956 ～ 2010 年）によって確認された日本系カラフトマスの沖合分布域

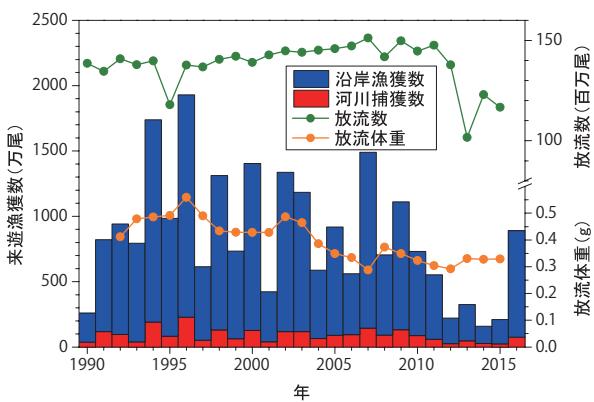
資源状態	
<p>稚魚放流数は 1980 年代から約 1.4 億尾で安定しているが、来遊漁獲数（沿岸漁獲 + 河川捕獲）は、1970 年代後半～1980 年代前半の約 100 万尾から、1990 年代には 500 万尾以上となった。2009 年から 2015 年は連続で漁獲数が減少する傾向にあったが、2016 年の漁獲数は 814 万尾と回復し、2009 年以前の水準に戻った。したがって、現在の水準は中位で横ばい傾向にある。</p>	

管理方策	
<p>繁殖期の降水量と冬期・春期の平均気温を説明変数として作成した再生産曲線を元に来遊漁獲数を予測し、現在の資源水準が維持できる河川遡上数を獲り残すという、産卵親魚量一定方策とした。今後は、放流効果と自然再生産効果の定量的な評価を行い、索餌域である北太平洋の生物生産も考慮した資源管理方策を開発する必要がある。</p>	

資源状態のまとめ	
■ 資源は近年不安定な状態であり、今後の動向を注視する必要がある。	
■ 資源安定にむけて、一定の河川遡上数を獲り残すという管理目標を実現できるように、漁獲制限などの対策を検討する必要がある。	



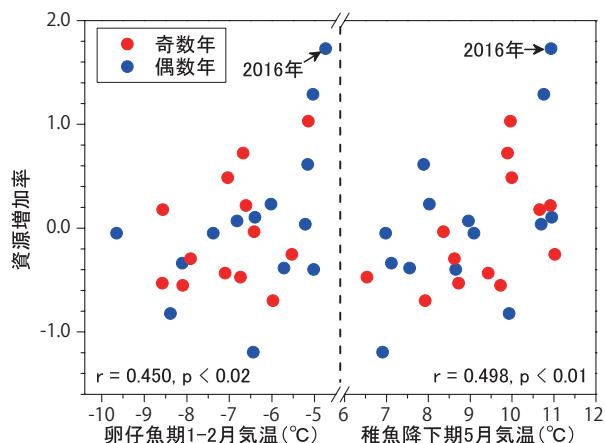
日本の漁業におけるカラフトマスの漁獲量経年変化



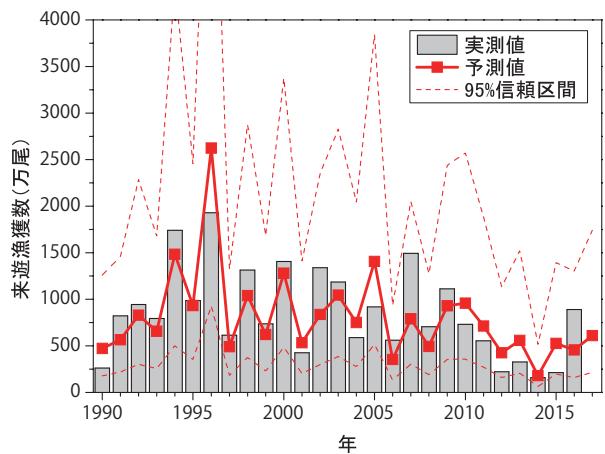
日本系カラフトマスの来遊漁獲数、放流数及び放流体重の推移

管理方策のまとめ	
■ 現在の資源水準の維持が管理目標。	
■ 一定の産卵親魚量を獲り残すことが必要。	
■ 自然産卵親魚の保護と効果のある放流手法の開発が必要。	

カラフトマス（日本系）の資源の現況（要約表）	
資源水準	中 位
資源動向	横ばい
世界の漁獲量 (最近 5 年間)	—
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	3,000 ～ 9,000 トン 最近 (2015) 年 : 3,348 トン 平均 : 6,000 トン (2011 ～ 2015 年)
最新の資源評価年	—
次回の資源評価年	—



日本系カラフトマスの資源増加率と卵仔魚期（1～2月）及び稚魚降下期（5月）の気温との関係



日本系カラフトマスの来遊漁獲数の予測値と実測値の関係